

草の芽句会だより

NO,114
18, 2月

純白の世界となりぬ春立つ日
春着物謡の会に出でんとす

節子

小波のきらきら光り春浅し
カーテンの春の光りの仏間かな

貞子

金柑の一夜に消えし鳥群団
一斉に花散るように寒雀

範子

白梅の枝さし交わす狭庭かな
名草に夕べの雪の残りをり

文子

暖かき冬日に誘われ庭仕事
プランターの野菜に寒肥少しづつ

貞

遠く住む孫より電話春うらら
梅に来る小鳥飽かずに眺めをり

芳子

水仙のかたまりである墓所
ほつほつと梅咲き初むる小鳥待つ

禮子

のぞき込む町家の小窓雛飾り
蟬梅の匂へる道を選び来ぬ

純子

お隣のピアノが聞こゆ雛飾る
雛の灯をいれてお喋り尽きるなし

剋子

思いがけない寒波で雪に見舞われた二月。凍えるような日々が続いたけれど、それでも全員
の投句である。私達って凄いな！。この底力はどこから？そんなことを考えてしまう。句の出来
はともかく(失礼)、続けることの大切さを考えるのである。

二か月間、句会の部屋がなくて不自由をしたが、三月からは従来通りに旧職場の部屋が使える
こととなり一件落着。又、皆でワイワイと雨にも負けず城山へ上りたい。人も羨む？楽しい草の
芽サークルである。来月は機械棟二階の部屋で気分も一新、すばらしい句が出揃うことを期待し
たい。

